

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	石原 みちる
2. 審査委員	主査：（岡山大学 教授） 大竹 喜久 副主査：（鳴門教育大学 教授） 葛西 真記子 委員：（上越教育大学 教授） 五十嵐 透子 委員：（岡山大学 教授） 西山 修 委員：（兵庫教育大学 教授） 松本 剛 委員：（岡山大学 教授） 安藤 美華代
3. 論文題目	スクールカウンセリングにおける教師に対するコンサルテーション実践モデルの作成に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 石原みちる から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成31年2月16日（土） 10時00分～12時20分 場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 講義室2</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、日本にスクールカウンセラー（以下、SC）が導入されてから今日に至るまで実践されてきたSCコンサルテーションの特徴と全体像を示すこと、また、SCと教師の双方の視点によるSCコンサルテーションのプロセスを明らかにすること、さらには、そのプロセスに基づくSCコンサルテーション実践モデルを作成し、それを初心SCに対するコンサルテーション研修の中で活用した場合の有用性について検討することを目的としている。</p> <p>論文構成は以下の通りである。</p> <p>序章 本研究における問題の所在，目的及び構成 第1節：本研究における問題の所在 第2節：本研究の目的と構成</p> <p>第1章 スクールカウンセラー・コンサルテーション実践の特徴とその類型 第1節：スクールカウンセラー・コンサルテーションの実践の特徴 第2節：スクールカウンセラー・コンサルテーションの類型化</p> <p>第2章 スクールカウンセラーの視点からみたスクールカウンセラー・コンサルテーションのプロセス 第1節：問題と目的 第2節：方法 第3節：結果 第4節：考察 第5節：まとめと今後の課題</p>

第3章 教師の視点からみたスクールカウンセラー・コンサルテーションのプロセス

第1節：問題と目的

第2節：方法

第3節：結果

第4節：考察

第5節：まとめと今後の課題

第4章 スクールカウンセラー・コンサルテーション実践モデルの作成の試み—初心スクールカウンセラーへの研修における有用性の検討—

第1節：問題と目的

第2節：方法

第3節：結果

第4節：考察

第5節：まとめと今後の課題

終章 本研究の総括と今後の課題

第1節：各章のまとめ

第2節：統合的考察

第3節：本研究の課題と今後の展望

序章では、SCが行うコンサルテーションについて、その特徴と全体像が把握されるに至っていないこと、教師の対応力向上の機序を含んだSCコンサルテーションのプロセスが明らかにされていないこと、SCコンサルテーションの教育・研修に関する研究に至っていないことを指摘し、本研究の意義を明確にしている。

第1章では、SCコンサルテーションの先行研究分析（55事例）を通して、SCコンサルテーション実践で用いられる理論的背景と定義、そこで取り上げられる問題、コンサルティの立場、コンサルテーション開始のきっかけにおける特徴を整理している。また、仕事上の困難（ケースか組織か）×目標と関与（直接関与を含むか間接関与のみか）×対応の構造（柔軟か構造化か）の3軸を用いてSCコンサルテーション実践を8類型に分類した上で、その類型を用いて日本のSCコンサルテーション実践の全体像を示している。担任を主としつつもコンサルティ以外への関与が並行すること、明確な契約の枠組みを持たず柔軟な形で継続することが、とりわけ日本のSCコンサルテーションの特徴であることを見出している。

第2章では、SCコンサルテーションのプロセスが記述されている事例研究（29事例）をKJ法で分析することにより、SC視点でのSCコンサルテーションプロセスを明示している。問題把握に続いてアセスメントを行い、見立てを伝え、対応を検討するという基本的流れの中で、SC視点を提供し、必要に応じて情緒的支援を行い、柔軟な枠組みで継続的に事例をコンサルティとともに抱えていくという支援のプロセスを明らかにしている。

第3章では、中学校教師12名に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、教師の視点から見たSCコンサルテーションプロセスを明らかにしている。SC視点を取り入れながら子ども・保護者の問題に教師が主体的に取り組むようになる上で特に重要なこととして、見立ての専門性と教師の取り組みの積極的意味づけ、教師との対等かつ後ろ盾となる関係の構築を挙げている。

第4章では、第1章から第3章までの知見に基づき、SCコンサルテーション実践モデル（以下、実践モデル）を作成した上で、実践モデルを用いた初心SCの研修会を実施し、その有用性を検討している。方法としては、SC経験3年以内の初心SC8名を2群に分け、グループスーパーヴィジョンを中核とした各群全4回（月1回）の研修と5-6か月後のブースター・セッションを行っている。1回目はコンサルテーションの概論と実践モデルの講義、2回目以降は1-2名が事例を提示して検討した後、事例のコンサルテーションの状況についてスーパーバイザーが実践モデルを使って振り返りをした。質問紙と面接調査の分析から、初心SCにとっての実践モデルの有用性として、コンサルテーションの基本的な流れの理解を促進する点、自身のコンサルテーションを振り返り、既にできている部分と次への課題を整理できる点、プロセスの各段階で具体的に取り組む行動を考えるための情報源になり得る点を指摘している。

終章では、日本のSCコンサルテーションの特徴として見出された継続的関与、柔軟な枠組み、対等性と後ろ盾、同時並行的支援の意味について、組織内部性と外部性の両方を併せ持つというSCの特殊性から考察している。

2. 審査経過

(1) 独創性と発展性について

SCコンサルテーションが日本に導入されて20年余りが経過している中、これまでの先行研究においては事例研究が個々に積み重ねられてきているものの、日本のSCコンサルテーション実践の特徴や全体像、あるいはSCコンサルテーションのプロセスとその促進要因を捉えようとした研究が存在しなかった。本研究では、個々の事例研究を丹念に紐解き、新たに作成したSCコンサルテーション8類型を用いて日本

の SC 実践の特徴を描いたこと、また、探索的研究を実施し、SC 視点と教師視点の両方を加味した SC コンサルテーションプロセスを提示したことは高く評価される。さらに、それらの知見に基づき、SC コンサルテーション実践モデルを作成し、初心 SC を対象とした研修の中で活用しながら、その有用性のある程度示すことができたことも称賛に値する。今後は、SC コンサルテーション実践モデルを用いたグループスーパーヴィジョン形式の研修会の効果について、SC やコンサルティイ、子どもや保護者、学校コミュニティーといった多角的視点から検証すること、学校コミュニティー全体の中での SC コンサルテーションの位置づけを明確にした実践モデルを作成すること、大学院での講義や演習、実習において実践モデルを活用し、その有効性について検証していくこと等、研究の発展が期待される。

(2) 学校教育の実践への貢献について

これまで、学校に配属された SC が参照できるようなコンサルテーション実践モデルは皆無であった。本研究で開発された実践モデルは、グループスーパーヴィジョン形式での研修の中で用いられることで、初心 SC のコンサルテーション実践において有効に機能しうる程度示された。このことは、心理臨床の専門家としての SC にとっては、学校コミュニティーの中でどのようにその強みを生かしながら臨床活動を行っていくかについてのガイドを得ることにつながる。そのことが、引いては、SC 視点を自分のものにしながら、子どもや保護者に関する問題の解決に主体的に向き合い、自分を向上させ続ける教師を増やすことにも貢献すると思われる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、石原みちる の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。